琵琶湖・淀川流域圏の再生計画

～　水でつなぐ“人・自然・文化”

琵琶湖・淀川流域圏　～

平成 17 年 3 月 30 日

琵琶湖・淀川流域圏の再生協議会

目　　　　次

■はじめに

■琵琶湖・淀川流域圏の現状と課題 …………………………… 1
自然環境 …………………………………………………… 2
都市環境 …………………………………………………… 11
歴史・文化 ………………………………………………… 19
流域の連携 ………………………………………………… 24

■琵琶湖・淀川流域圏の再生に向けての基本的な考え方 ………… 28
基本理念 …………………………………………………… 28
基本方針 …………………………………………………… 29
計画期間 …………………………………………………… 30

■琵琶湖・淀川流域圏の再生プログラム ………………………… 31
みずべプロムナードネットワーク ………………………… 32
水辺の生態系保全再生・ネットワーク …………………… 38
水辺の賑わい創出 ………………………………………… 44
流域水環境再生 …………………………………………… 50
流域連携 …………………………………………………… 57

■琵琶湖・淀川流域圏の再生計画の推進方策 ………………… 61

■　はじめに

琵琶湖・淀川流域では、平安京をはじめとする都が千数百年にわたって引き継がれ、わが国の政治・経済・文化の中心地として栄えてきた。その繁栄を支えたのは、琵琶湖・淀川を中心とした交通、物流網であり、また都の周辺部においては豊かな自然の中で、森林や農用地が一定の役割を果たしてきた。琵琶湖・淀川流域は、このように長きにわたり自然と人間の活動が調和した生活経済圏を維持してきた。

近代以降、琵琶湖・淀川流域は、都市化の進展により、大阪、京都をはじめとする多くの都市が発展し、我が国有数の人口、資産が集積した地域となった。その一方で、農山村地域からの人口の流出、産業構造の変化、自然素材の生産物から各種の工業生産物への転換等、流域資源に依存しない産業形態が進展した。また、従来の湿地低地等の河川氾濫原にも都市域が拡大していった。

高度成長から安定成長へ向かう 1977 年に策定された三全総では、地方を振興し、過密過疎に対処しながら都市､農山漁村を一体とした新しい生活圏を確立することを目指し、流域圏に着目した定住圏構想が示された。それ以降も都市的土地利用は進展し、生活様式の変化、流域内外に広がった交通網と情報ネットワークの形成等により、流域で構成されていた生活経済圏が変化するとともに、人口や産業の集中により環境負荷も増大して、流域の環境は変化していった。

1998 年に策定された「21 世紀の国土のグランドデザイン」では、定住圏としての流域圏ではなく、自然環境等の面での結びつきが中心である流域に加え、洪水時等に影響を受ける氾濫原､及び人間活動のための水利用地域を含む圏域が流域圏として定義された。琵琶湖・淀川流域圏の京都や大阪等の都市は、古来、田上山等の木材によって数々の都が造営されたように、流域がもたらす様々な恵みを享受し、成立・維持してきたことから、流域圏の都市は流域によって育まれてきたといえる。

2003 年３月には、京都、滋賀、大阪で第３回世界水フォーラムが開催され、水は持続可能な開発や人の健康や福祉にとって不可欠なものであること、水問題を優先課題とし統合的水資源管理を促進すること等、閣僚宣言として琵琶湖・淀川流域からのメッセージが世界に発信された。

2003 年 11 月 28 日には、都市再生本部において、第６次都市再生プロジェクトとして「琵琶湖・淀川流域圏の再生」が決定された。これを受け琵琶湖・淀川流域圏に深い関わりを有している関係省庁及び地方公共団体からなる「琵琶湖・淀川流域圏の再生」協議会を設置し、流域圏として一体的・総合的な施策を展開するために、「琵琶湖・淀川流域圏の再生計画」を策定した。琵琶湖･淀川流域圏を健全な姿で次世代に継承するため、「水でつなぐ“人・自然・文化”」を基本コンセプトに、流域圏のあらゆる関係機関が連携して本計画を推進し、「歴史･文化を活かし自然と共生する流域圏･都市圏の再生」の実現を目指すものである。